【134】

氏　名（本　籍）	酒本雅之（岡山県）
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第299号
学位授与年月日	昭和61年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	沙漠の海ーメルヴィルを読む
主　査	筑波大学教授　岩元　巌
副　査	筑波大学教授　川口喬一
副　査	筑波大学教授　利沢幸雄
副　査	筑波大学助教授　森田　孟

論文の要旨

本研究は，いわゆる「アメリカン・ルネッサンス」期の最も重要な作家の一人，ハーマン・メルヴィル（Herman Melville，1819〜91）を，同時期のアメリカの精神風土の中に見据えて，彼の文学世界の全貌を作品の緊密な読みから再検討しようとするものである。ことに彼の文学世界を自身の苦渋にみちた真摯な世界認識の旅の成果として捉え，数多い作品のすべてを制作年代順に巨細にわたって綿密に検討し，作者の精神構造のあり方，想像力の働き方の軌跡を鮮明に提示しようとしており，本文438ページ，注，年譜，書誌，索引などを加えて474ページに上る大作である。

研究者の間で難解として知られているメルヴィルの厖大な全作品を酒本氏はその細かな文章の端々に至るまでよく視野に収め，主要な先行の研究の殆んど全てに通暁した上で，それらの成果を具体的に援用しながら自身の分析を進めている。メルヴィルの文章の有り様，各主人公の姿，それらの錯綜した相互関係の意味が執拗に探索され，作品の一見さりげない出来事にも隠されている象徴的な意味の発見が試みられている。そして，それがいずれも，作者の認識上の葛藤，精神の二重構造，多声性をもった想像力の現われであることが具体的に論じられている。その際，同時代の他の重要な作家，ホーソーン，エマソン，ソーロー，ホイットマンの作品が具体的に詩句・文章の引用と共に引き合いに出されて，比較・検討され，メルヴィルとかれらの同質性と異質性が明らかにされ，メルヴィルの特質がきわめて鮮明に論述されている。

序章「旅人考」においては，芭蕉の句「旅人とわが名呼ばれん初しぐれ」から論が始められてい

るように，先ず「旅人」の概念を捉え，しかもメルヴィルの最大の作『白鯨』の冒頭の文章“Call me Ishmael”の中に芭蕉の想念と同質のものを見出しながら，メルヴィルとイシュメイルの同質性を明らかにした上で，彼の文学上の営為が，実生活における「旅人」経験を踏まえて築かれた精神の壮大な「旅」であるという大きな枠組が設定される。

第一章から第三章まではメルヴィルの少年期から青年期への海の放浪を終える体験と，作家として海洋ロマンスの小説を書きはじめた初期の二作『タイピー』と『オムー』を扱っている。ここでは文学上の「船出」を開始するまでのメルヴィルの精神が検討され，それが『創生記』において荒野の放浪者となる「イシュメイル」の精神に相当するものであることが少年期の体験－特に母および兄との心理的関係に発するもの－によって実証されている。さらに，海洋ロマンスの作家として，『タイピー』，『オムー』の中で，文明と現実世界を拒否したメルヴィルが楽園としての別世界を求めようとした姿が明確にされている。そして，外見上の楽園物語の中にたえず厭世的放浪者としての作者の意識が存在することが具体的に指摘されている。

第四章から第五章までは，『マーディ』，『レッドバーン』，『イズラエル・ポター』，『白ジャケット』の四作を扱う。ここでは，ロマンス作家からより強く真実を求める作者へと転ずる転機とその精神の変移が論じられている。ことに，この頃からメルヴィルが人間の現実世界に「完全な映像」を求めてやまぬ気持ちを強く抱くようになり，人間の眼に見える限りそれを求めようと飽くなき凝視を働かせ始めたことが作品の中に見てとれることに着目し，メルヴィルの中にめざめてきた重要な二つの概念－人間存在の限界を悪鬼と変じても超越すべしという考え方と，限界という状況に合わせて自らを偽装し，あえて「詐欺師」に甘んじて生きるという考え方－に至る過程を追求している。ここで追求されたものがやがて『白鯨』という大作を生みだす要素となったことを詳しく論述している。

第七章は，本研究の中心をなすもので『白鯨』を扱う 70 ページに及ぶ章である。ここではメルヴィルの分身的「語り手」イシュメイルと主人公のエイハブ船長をはじめ，数多くの主要作中人物の特質を様々な角度から検討している。ことに，エイハブの白鯨追跡の衝動は「真実」の探求を目指す認識者としてのものであることが立証され，さらに人間の正気と狂気，人間と神の関係など当時のアメリカ精神に照らして明らかにされる。従来，エイハブの理解は悲劇的英雄像によって捉えられていたが，それを人間に内在する道化的要素によって捉え，この雄大な白鯨追跡の物語の背景にメルヴィルのペシミスティックな人間観を見ている。

第八章から第十二章までは，『ピエール』，『ピアザ物語』，『信用詐欺師』，『戦争詩集』，『クラレル』などを扱う。ここでは『白鯨』で執拗に求めた「真実」探求の結果，メルヴィル自身が迷路にさまよいこむように，果てしない認識の旅人となっていることが明らかにされ，また世間的にはひたすらに不遇な作家へと転落する様が語られる。

ことに，『信用詐欺師』において，メルヴィルの認識は深まると同時に非常に屈折したものとなったことを立証し，人間の世界そのものが「詐欺」であり，そこで人々は「芝居を演じている」という皮肉な認識からこの小説が始められていることを論じている。また晩年の最も難解な長詩『クラ

レル』については，それが書かれた時期のメルヴィル自身の物質的，精神的苦境と照らし合わせて詩句の読解につとめ，「不信」という沙漠の海をさまよいながら「信ずることのできるもの」を求め続けるメルヴィルの秩序回復への意欲の具現がこの作品であると見ようとしている。

終章では，メルヴィルの遺作となった『ビリー・バッド』を論じ，これが未定稿であることを詳細に検討しながら，その制作過程での変容の意味に着目している。そして，「真実」探求者としてのメルヴィルがここでは世界の受容，超越のいずれもとることができず，遂に自己抹消を試みた作品であるとし，この遺作そのものが，認識の「旅」の終点であったとして全論考を終えている。

審　査　の　要　旨

1) メルヴィルの文学上の營為が，彼の精神の，特に，世界認識の旅の成果であるとする発想は必ずしも目新しいものでないように思われるが，それを彼の全作品を通じて当てはめて，メルヴィルの人生と作品世界の全貌を一貫して捉えようとした研究は従来皆無だった。それを実に厳密な作品の読みによって行ったことが本研究の第一の功績である。

2) メルヴィルを同時代のアメリカの精神風土の中で捉え，他の重要作家たちとの比較考察が適宜随処で具体的になされている。「アメリカン・ルネッサンス」として知られるこの時期の文学研究にすでに優れた業績を上げてきた本研究の作者は，他の作家たちとの比較によってメルヴィルの像をより明確に，そして克明に描出し得ている。また，これがメルヴィル同様に論者にも複数の視点を与えており，文字通り多様な角度からメルヴィルを捉えようとする研究者として理想の姿勢を示している。

3) 上記の複数の視点による論述にもかかわらず，論者の文章は明快，明晰であり，しかも論が図式的にならず，対象の姿をよく捉えている。

4) かつ，論を進める上での立証は，具体的に，個々の文章・語句の厳密な吟味によって行われており，文学研究としての最も重要な根幹である「テクスト」の読みという方法が十分に発揮されている。

5) 難解なメルヴィルの作品の解釈に際して，先行の研究成果がよく，必要に応じて援用されているが，さらに加えて独自の解釈を各所で加えている。この援用と独自の解釈の補充が理路整然と行われており，説得力がある。

6) これらが，文学研究にふさわしい香り高い文章で論述されており，この論考そのものが読む者の心を打つ立派なものとなっている。

7) 年譜，書誌については必要にして十分の感があるよく整備されたものである。なお，書誌については，それぞれの項に論者の寸評を加えてあり，それだけでもメルヴィル研究の経過がわかるようになっており，論者の学識の高さをよく伺わせる。

以上のように，本研究は優れた特質を持っており，これまでわが国で発表されたメルヴィル研究

の論としては群を抜くものである。もちろん，視点を変えれば論者の導きだした結論と異なったものに至るであろうし，異論も生じうるであろう。しかし，本研究の場合，望蜀の言は不用のように思われる。部分的にも，総体的にも実に立派な成果を挙げることのできた論考であり，おそらくわが国のアメリカ文学研究において近年にない成果であると考えられる。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。